ミーバーを構成する物質的分類に於て、細胞の原形質及び細胞液そのものにまで遡って、それ等の持つ素粒子の質と量が、蒼生の当初に於て、すでに個差のもとに成立した、異態的独立体であったことの証明と云える。

目は目の独立と機能のもとになり、心臓や肺と同一のものとは云えない。

要するに、各原子の構成要素が異るように、素粒子論は実証する所であり、それと同様な例を、生物学的にも実証されるものの様に考えられる。

ではこの動植物の発生は、ダーウキンの種の起源で云うように一元であろうか？

水棲から水陸両棲へ、そして陸棲、飛行性とかくも順序よく進化したものであろうか、この基本的にある独断と誤りはどこにあるのか？

地球の冷却は一様ではなく、寒、暖、冷、熱、水、陸、高、低、深、浅、乾、湿、等々は一様、一時にできたものではなく、又その度合の相違や万化万様の発展変化があり、その中に、各地域、地質の異差による種々なる発生起点もある、樹木や昆虫としての発生と、動物としての発生は自づと異るのであり、それに準じた細胞の発生を思考することがなかった、即ち群生と特殊の多元性を思うことのなかった、単一的見界の謬理としか思えない。

二、史観上の動物的特殊性

動物万般に共通するものとして、多少厚薄の差異はあるものの、四大本能（自己保存、種属保存、好奇、社交性）があり、これは同じく生物である、植物界にもその類似現象を見る事は出来るが、その植物界との決定的な相違点は、動物は任意に意識活動をなし得る事であり、頭脳的動作を作用量子として持つ個体の運動がある事である。

即ち植物界との相違は、単細胞的構造の相違は無論の事、各独立した作用量子を含む肉体的構成の上に、頭脳的構造のある事である。

物質がその原素的分類に於て、多数に渉る如く、植物界も多種多様であり、昆虫動物も亦、各々その個性に多種多様なものがあらわれ、独立と個性を持続しつつあると云う事は、各その特殊性に於て、存在そのものを意義あらしめていると共に、個性の差異を判然と維持している事である。

然も、この差異が大小無限の形態に加えて、意識活動そのものにも、深浅強弱、無限の差異を決定的な要素として、動物全般の個性に見なければならない、と共に、それが最も妥当なものとして考えられる。

即ち生物の、特に動物の『種』の起源は、一元ではなく多元である、と敢えて私は断言

したく思うのである。

三、史観上の人間的特殊性

人間の肉体を構成するもの、それは死ねば単なる単細胞から原素分子にまで帰するであろうが、要するに人間とは、個性ある生きた人間的単細胞の群結融合の一であり、併もその構成に当って、各その個性ある独立した部分（脳、心臓、その他）が相互連帯性によって、群結融合の一（肉体）を構成し、独立した個性ある個体になっている。

この個体は、他の現象及び万原素との関連と融合により、影響し合う事によって存在し、即ち連帯性によって、人間としての個性を持続している。

無限の数を加味した群結融合の一が、万物象の実体であると同様に、人間各個も、その『一つの場』としての群結融合の一であり、確立された個性ある『一』と云う普遍的実体である。

併もこの場合、その肉体を構成する独立した各部分の個が、相互に常に融通無碍であり、一定に静止する事のない、流通自在の変動を主因として組織構成されている。

所謂物理学上の一物質が、あらゆる生物の中に、凡百の縁由によって融合溶解し、生物を存続せしめるのと類似し、生ある間、あらゆる原素物質を吸収し、新陳代謝して止まな

い、生物としての個性ある独自の流動が、運動として生体内に続行せられ、生の壊滅、即ち生物としての生命を終った時、その生体構成の分子であった単細胞は、共に生命を終え、原素分子と化し、万物万象の構成原体へ、次代の物質的、群結融合を求めて移動する。

即ち核分裂したものは、常に核融合を結果する。

なお、岐阜在住の小林久男氏が編集発行している、『生命と気血』という会員制による隔月誌によると、その医学的論理の基点は、気、血、動にある。

これは、気（精神）、血（肉体）、動（本能）と解釈して誤まりはないように思えるが、それ等の三味一体観に於て、医学的、治療医学的な展開を見ていられると察せられるが、もともと人間は、これ等分析的な局部性にとらわれてはならないものなのであって、三味一体観こそ、正しい基本観であると納得し得るのである。生体そのものは、それ等を不可分の融合体として持ち、その中の一部面の不調は、総体の不調和を意味する、病理といえる。

又『無核の赤血球が、無数に集まって、一個の卵子や核を新生し、精子は解体し細分化する。

『赤血球は無数の有核細胞が崩壊して、一個の卵細胞になる。』

云々には、筆者に素粒子論を連想させ、非常に興味ある課題を教示した。

血液、血球の崩壊や融合、それからおこる作用量子としての、ある種の温度（体温）や、熱量によって、次代に異質のもの、又は新粒子を生ずる、あるいはその発見となる、即ち細胞の発生、又は新細胞の発見である。

これはちょうど、崩壊された原子核が、次代の融合の過程で、高度の熱量を生じ、新原素を産み出す、あるいは、はじき出すことに似ている。

で、新陳代謝と云っても、崩壊（精子）に向うものと、融合（卵子）に走るものとの、綜合的な見方が必要だと思われる。

生物体の生体の特性として、その所有する新陳代謝とは、個体の内部での、崩壊と融合の同時多発性を意味し、それは又、同時的状態（総体に及ぼす同時連鎖反能）であり、素粒子論上の量子そのものの状態に似て、連帯性そのものの表徴でもあろうか。

しかも、融合反能によって温度（熱量）を保持し、ために作用量子の活動となり、不確定性も自づと生まれ、相補的な不可分の体をなし、ひいては総体（一個体）の調和を意味する、健康体が維持されるのである。

要するに、基本的な意義に於て言えることは、動（本能）と血（肉体）と気（精神）の融合した一個体。即ち一個体としての発展と進化が、その微視的現象の中で、ある時は崩壊し、ある時は融合（獲得性）として組織されている。

併も完全なる調和、融合が、常に一定の健康体として、実証されることであろう。

又融合の総合体に体し、部分崩壊が不調になり、強度になった場合は、病理原象であり、それが環境その他、自身の脆弱化による、連鎖反応的拡大が、個体自身（部分をも含む）の衰退となり、完全崩壊は、個体（融合）の原理である、温熱の発生基因の喪失を意味する冷却であり、死である。

これは個性の壊滅であると共に、個体そのものの、外部への放散的分解であり、解体し細分化され、個体外への外的融合に走り、それへ到達する。

これは生物の一切に共通する、日常の状態を意味する。

しかも人間以外の生物は、自壊作用、及び外部からの侵蝕、又は環境的派生の部分に於て、崩壊し、破壊されるが、人間はこれ以外に、自身の意志及び意識活動（精神）に於て自らを防衛し得ると共に、己れ自身を破壊することも可能である。

これこそ、人間ゆえの特殊性として尤なるものであろう。

以上の肉体的構造をもとに、動物各個の特殊性を見るその中で、人間的特殊性は、原子構造が、電子の数量の差異によって、異質のものを構成する様に、人間的個成の構成に当っても、それと同一原理を見出し得る。

人間と云う『種』の個性は、その生物的個体の発生当初に於て、たとえそれが、現生の人類と名付く可き形態でなかったとしても、あるいは猿類と同等の形態であったとしても、『種』そのものの主体は、その構成要素に於て、すでに他の動物とは異質のものであり、人間を構成する生体の素因は、環境のみに依って後天的に形成されたものではなく、勿論猿と分枝したものではない、人間の肉体的構成要素（素粒子及び単細胞とその原形質と細胞液）の質量に於て、その蒼生当初、すでに他の諸動物と相違する、一異体としての、人間的個性を持つものであった。

即ち猿は猿であり、人間は人間であったので、唯猿に近似する生活形態が存在したという、その相違だけのものであり、『種』の起源に於て人類であったのであり、単なる外部環境のみに依って、猿が人類に進化し得るものではない、唯人間は人間と云う『種』の育成解程に於て、光波光粒子、宇宙線、中性子、その他、多くの宇宙に実在する放射能その他の物質、即ち環境を媒体として、永年の蓄積を経て突然変異をなし、それがたえず原体に働らきかけ、遺伝質となって現在に至った。

これの実証は、過日の、広島、長崎の原爆症の調査研究に於て発見された、遺伝及び突然変異の事象で解るように、人間では小頭児の出生、猖々蠅や稲の突然変異は、変種するのではなく、そのものの『種』に於て独自の変異をするのであって、人間は人間の儘、蠅

は蠅、昆虫は昆虫以外ではなく、稲は稲としての変異を証明するものであり、蠅が蚊になる事ではなく、人間はあくまでも人間であり、草は草である。

人間が猿に変化することはなく、人間としての進化をしてきたのであって、たとえそれが、現生の人間から見て、人間的には退歩である未来があるとしても、人間的個性に於ける発展であり、進化である。

一九六五年十月四日、米国ハーバード大学の植物学者、バグホーン教授は、四日第七十七回米地質学総会で、「地上に存在した、最古のバクテリアを発見した」と発表した。

同教授によると、この微生物は、さる二日、南アフリカのバーベルトン附近で採取した、けい素でできた黒色の、微結晶鉱石に化石となって発見されたものであり、約十五億年前に生存したものと推定されている。

又、単細胞から二十億年かかって、人間としての進化をした、と数学者の岡潔氏は云っているが、その進化の経路はどんな軌道を通ったものか、その基点は一元的なものであったか、多元的なものであるのか？

以下の実例は何を意味するか、ダーウイン的な論理がそれによって、変更を余議なくされることもあり得る、と私は考える。

南アメリカのアマゾン河流域に、現に棲息する爬虫類で、マルマヂロは六千万年前のも

のと同一であり、南アメリカはエクアドル沖の、ガラパゴス諸島にいる、ゾーガメは二千万年の歴史を持ち、オーストラリアのカモノハシは、一億五千万年前より棲息したものと言われ、ニュージーランドのキウイは、七千万年、日本の瀬戸内海にいるカブトガニは、二億年の年を数えられ、アフリカには、現に棲息する五千万年前のカバといわれる、コビトカバがおり、四億年前の化石になっている怪魚・シーラカンスは、アフリカのマダカスカル島附近の、仏領コモロ諸島沖で、生きた化石といわれる、その姿をあらわし、一九六五年十月現在、その捕獲数二十七尾を数えられ、五千万年から七千万年前に、絶滅したと信ぜられていた珍魚で、現に健在である。

又、日本産大サンショウ魚は、二億年以前からとも、五千万年前からの生物とも云われ、なお、アメリカの袋ねづみは、七千万年前から地球に棲んでいて、現住する動物である。又マダカスカル島には、生きた化石と言われるキツネ猿がおり、その上、昆虫類の歴史は古く、鈴虫などは、恐竜が地球上を濶歩していた時代、すでに姿をあらわしていたと言われる。

又、古代の馬は、現在の小犬程の小軀であったが、現状の大きさに進化し、しかもその体軀を保持している。これは馬はあくまでも馬であり、象その他の形態ではなかったと言える。

最近（一九六七年三月十四日）世界的な人類学者の一人である、ルイス・リノキー博士は、アフリカ、ナイロビの西方、四百八十キロのキスム附近、ビクトリア湖内、ルシンカ島内で、人類のもっとも古い祖先の化石、男女、子供、九人の骨片を発掘、ケンブリッチ大学のジャック・ミラー博士等専門家によって、千九百万年から、二千万年前のものと判定された。

等々、これ等の引例は、『種』の起源は多元であって、突然変異や進化によって、『種』そのものが他種に変化するのではなく、あくまでも、その『種』に於ての進化発展であって、他種のものに変化することではない、ということの証左であると言い得よう。

なお、生物の最少単位の細胞であるが、蠅は蠅の単細胞の群結融合の一であり、クラゲはクラゲ以外にはなり得ない、即ち単細胞に於て、すでに各個性に相当する因子を持ち、その個性の範疇に於て変異するものである。

人類と猿の如き一類似現象にしても、あくまでもそれは類似現象であって、同一現象ではない。種性の相違は、猿類と人類との、過去に於ける、永い不同一の事象と共に、未来にあっても、永遠に同一することのない、相違ある進化と発展がなされるのである。

人類的進化、及び文化の発展は他動物界にはなく、人間的個性をその基点として、環境はその媒体となり、人間的個性の発展と進化を、未来に渉って継続するのである。

では、人間的個性と他の動物の持つ個性との、著るしい異特徴とも云う可き、その人間的特殊性とは何を指すのであろう。

それには形態的変異と共に頭脳的差異をあげねばならぬ。即ち能力の相違であり、独立した個性を持つ脳細胞の構成、及びそれに相応した、作用量子としての精心活動をなし得る事である。

これは、精神的特殊性を持つ故の頭脳的差異、及びその発達を意味し、生きる限り余議なくされているその創造的意欲は、意識活動として、他の一切を利用し、自らのためと、同種族のために活用する行為を産み、創造し飛躍し続け、人間は、人類にのみある歴史を創造し続けるであろう。

然もこの人間的個性は、自余の媒体や環境によって、変化し流動し続けるであろう。

なお、人間そのものの個性の分析には、本能そのものの種類別、及びその相互間の在り方、作用量子としての精心と本能との関係、その他、意識活動と環境、及びその時点に於ける本能それ自身の在り方、特殊量子としての意識活動、等々、多くをあげねばならぬが、本論『史観』に於て分類詳述する。

四、史観に於ける本能論的分類

本能はそれ自身、生物、特に人類生存上の最も主体的なものであり、その本能を分類すると、自己保存、種族保存、好奇、社交性、の四大本能に分類でき、その中のどの一つをもってしても、史観としての主体性を持つ反面、部分を構成するものとも云える。以下、各項目別に記述して見る。

(イ) 自己保存の本能

この本能は、衣食住の進化発展の為めの、母体であると共に、万生物及び人間各個の生存を決定づける主体であり、寒ければ着し、空腹には食い、幼児はこれを訴え、寝る為めに住む、又時に危害の迫るのを感じとれば、防衛の為めの行為を、無意識の内に行動する素因である。

時ならずまばたきしたり、不意の襲撃を肘を持って防ぐ、等々常に見受ける行為がある。

又恐畏や不安は、自己保存の本能が意識化にまで発展して、自己防衛的行為と想念を、積極的にまで為さしめる素因であり、自己保存の本能の原始的形態としての、精心的現象であると云える。

その他、自己防衛の為めの意識活動とその行為は、この本能の実在を示すものではある

るが、これは、環境的派生感念による意識的所産であり、本能それ自体ではない、なおこの本能による現象に、空腹的脅威や、生命無保証の環境内では、時に否社会的にまで発展する、意識活動を誘発する。

(ロ) 種族保存の本能

人間と云う種族の現に存続する由因であり、人類史にとって、現に解っていながら、兎角歴史から忘れられがちな一大因子である。

男性が女性を、そして女性が男性を求める心、子を持ち度く思い、あるいは子を持つ故の父母の自己忘失の愛情、等々、すべてこの本能による現象である。

しかし、この場合、人間である為めのその特殊性として、これを快楽の対象にまで、意識活動を発展せしめている。

この本能は、平等と自由を保持されている環境内では、殆んど障害性に乏しく、不自由と経済的、階級的不平等の存在する環境内や、快楽的意識化の方向に於て、自殺、他殺の否社会的な、非常に多くの悪事象を暴露する結果もあり得る。

(ハ) 好奇本能

人類文化の母であるこの本能は、空を飛ぶ鳥を見て空中飛行に憧がれ、海の涯を思って陸地の発見となり、月を見て、それの究明と到達を思考する、又、あらゆる創造の主動力

である火の発見は、人間なればこその所産であり、最初にその火に触れた、好奇的触手を忘れてはならないであろう。現に巷間よく小児にその現象が見受けられる。

発明・発見は、個人にあるこの本能の、衝動のもとに誘発された意志、及び意識活動の結果であり、創造的意欲の結集である。

これ等を発意する因子は、この本能が存在する為めであり、この場合、環境は媒体として利用され行使される。

この好奇本能は、本来は強固な個人差を基点としており、各個人の個性の内に燃焼し、意志として発展するが、結果的には社会性を持つものである。

(ニ) 社交性本能

互譲的現象は原始的秩序の典形であり、社交性本能の最も美しい現われだとも云える。この本能があればこそ、他人を慕う心ともなり、孤立に苦しむ心も、この本能が素因になって誘発された意識である。

その他、自らの身を投げて他人を救う可く、敢えて死地に入り、犠牲的結果を生むに至る相互扶助の行為は、この本能の部分的現象である。

……註：クロポトキン―一八四二―一九二一―著『相互扶助論』参証。

人間の日常生活に於ける一日の内にあって、その大半を占める、家庭に、街頭に、職場

に、継続され保存される、無意識的融和や、それ故に尤も自然に保持される、秩序の総体の素因も、この本能があればこそであり、満員電車その他の混雑する場所で、無意識の内に譲り合う事によって、自づと作られる秩序が、この場の混乱をさけ、平和を維持しているが、この平和を破壊するものは、早く降り度いとか、乗り遅れない為めに焦る意識活動の結果か、若しくは、故意にかもす喧騒と云う意識行為の、結果としての争闘形態であり、本能そのものではない。仮りに、この場合、争闘本能なるものがあるとしたら、混乱と争闘と殺人とが、平然と遂行されるであろう。併もそれが常態と云う事にもなる。これは想像を絶した愚論と云える。

街路を歩行する時、意識なく保たれる秩序の素因も、この本能が存在するからである。即ち強制なく無意識の中に自然に保持される、自然そのものが生活に交友に、尤も自然に生物に附与された秩序の実体である。

個人的には意識以前の状態であり、習慣はよくその秩序を維持する。

為めにこの本能を、社会的、又は社会性本能とも名づける。

なお、社交性本能が社会秩序の基本的動因であり、これあればこそ一切の集団は常に秩序ある方向を辿り、あるいはそれを維持する事が出来る、と共に、この本能が、高度に美しく発揚された現象が、相互扶助である。

と云う事は、社交性本能の部分に相互扶助があると云う実証である。

この社交性本能の一部面として表現される、相互扶助の事実を、意志し認識することによって、それを、行為化し社会化すると共に、習慣化する事こそが、倫理の最高の域を、そしてその在り方を示唆するものであり、道徳の基本源がここに察知されるのである。

然もそれを常に探究し深め、常時施行される環境を作り、習慣にまで高める事こそが、人間に課せられた使命であり、人間なればこそなさねばならず、又なし得る、意識活動の目標となり得るし、社会的に見た、平和な美しい環境もそこに育くまれ、平和も幸福も真の秩序も永続するであろう。

これが実践される為めには、現実の、この人間性に反する巧利的・意識的、強制的秩序の不自然と、不当と不正の世にあっては、断えざる意志による努力が必要であり、常に積極的な、意識活動を伴なう、権力的であり、支配的でさえある、既成倫理の破壊に指向する、行動がなくてはならず、環境浄化の為めの社会運動が、繰り返えされずにはいない、人間的必然がある。

生活的苦痛の為めに、懊悩にひしがれた隣人を、無為には見過ごせない素直さが、故意に抹消され、又貧富の差や、階級と云うある可からざるものがある、この偉大なる無秩序と矛盾を、この人間にのみある恥づ可き事実が、排他的な、時には虐殺的でさえある意志

と、虐待的な意識行為を、然も持続的でさえあるこの人々の意識行為を、そしてそれを維持する社会を、否認し侮蔑し、その絶滅と破壊のための闘いを、個人の心の中に、隣人や大衆の中に、又、国家国境と云う、愚劣で空虚な境界を設けることや、人間差別と他民族蔑視の思念の中に、この本能は意志となり、意識活動と化して、闘い続けるであろう。

この社会性本能があればこそ、永遠の平和を希求することができるのであり、しかもそれがなし遂げられる、確信も把握できるのである。

こうした美しい本能現象を所持すればこそ、それを積極的に意識化し、社会思想として、昇揚し実践できる社会、そして、それを習慣化にまで高めた世界こそ、人間なればこそできる、最高の秩序であり、徳義であると共に、希望ともなるのである。

これによって、延いては、人間であることの誇りと、証しが立つと云い得られる。

人間は、本来融合を求める動物であり、それを意識し行動し得る動物である。

親が子を産み、生育する、又女と男、そして人間の存在そのものは、本質的には対立的事象ではなく、融合を求め合う以外ではない、この融合を立証するものに愛情がある、この愛情は融和を求める行為の基点になっている。又個はもともと連帯の中の個であって、この連帯性こそ、社交性本能そのものによって、つくり出されたものなのである。

要するに一切の秩序は、相対的な融合を意味する、社交性本能を基源的な原体として、

発展し秩序をも維持する、生物の基本的な秩序原体であり、健康な状態に於ける、人間生理の、尤も自然な結果なのである。

(ホ) 相互争闘は本能そのものではない

生活や生命を保証されない社会的環境が、常に各自の本能に衝撃を与え、ために防衛のための精神的誘発と云う、必然的経路を経て意識活動となり、食糧の蓄積や、その他のものの獲得に、積極的なものを現わしてくる。

一食の不安は一日の蓄積を思い、一日は一ケ月を、一年、十年先きをも考慮する、人間である為めの、その特殊な意識的能力を発揮して、自己及び家族の不安に対する自覚症状を伴い、他人を犠牲とする意識行為を遂行せしめ、争闘を惹起する、商人はこの好適例である。

要するに相互争闘は、自己保存、種族保存、時には好奇本能、の各本能が、不満な、あるいは不幸な環境に、精心的誘発を受けて派生した、意識活動の結果であり、個人的な場合も、又その堆積である集団の場合も、共に生活や生命に対する恐畏が、期せずして集団化し、防衛的抗争形態を取らざるを得なくなる。止むに止まれぬ心の爆発と云えよう。米軍基地拡張反対の為めの集団闘争や、原水爆保持及び実験反対が、何人も拒否し得ない、真実の叫びである事を教示して余りある。

なお、もっとも権力的であり、虐殺的支配の時代に於ける、一揆、暴動、反乱がよくこの間の消息を物語っている。

これ等は、社交性本能が環境に刺戟され、誘発された、一種の自己防衛的意識活動の結果である。

また、防衛意識が、ある時は攻撃的意志にまで、高揚し積極化した為め、無理にでも獲得しようとする、止む事のない意識活動であって、生活や生命の、保証される事のない環境が生み出す、本能的必然を、その主因とする。

なおこの場合、守勢のものは、その動機である、自己防衛的な性質を失うまいと努力をするが、意志が意識的に昇揚され、積極性を持ち、完全に攻勢化したものは排他的であり、時には他殺性にまで発展する、こうした意識活動を誘発する。

この攻撃性を常に堅持する典形的なものに、権力支配と政治勢力がある。

これ等は多年の経験を意識した、人間のみによって作られる、自己保存と相互扶助（依存）の意識的所産であり、その変形である同階級とか、同族、利益集団の同盟、又は団体と称す可きものである。

又、政治しようとする潜越極まる仲間の徒党であり、資本家、財閥の如く、搾取する立場のもの同志が、その立場に於て、共同防衛体を堅固に維持する為めに、大衆の生活的、

経済的不安と恐畏を利用し、その人間的な当然な欲求に対し、強権を持って望み、法律によって制圧し、その犠牲に於て地位を持続する為めには、常に攻撃的に、自らの陣営を保持しようとする、が、彼等は常に彼等自身の利益を主にした、意識的な相互利用の団体であるが為めに、本能的な意義に於ける融合性がなく、常に相互に闘い合い、滅亡し合わねばならぬ、本能そのものの持つ秩序を、意識的に否定した動機を持ち、意志による他殺性と、排他的なるが故の宿命からは遁れ得ない。

即ち、利己的な意識活動が、利害関係によって結ばれたが為めの、相互争奪性を失し得ないのである。

これは、自由主義国家と称するそのものでも、又、マルクシズを信奉する労組内の権力闘争や、ソ聯、中共、その他、共産党政治下で常に繰り返えされている、相互不信と敵視による、粛正又粛正の反転が、よくその間の消息を実証している。

この様に、政治家仲間に於ける、主流反主流の権力争奪闘争が、断ゆる事なく繰り返えされる、この事実を、その基本線にまでさがのぼって見つめ、考える可きであろう。

その他、法律を、そして支配権力者である彼等にとって、有利に作りあげられた道徳を意志するが故に、排他的であったり、時には他殺的、死刑でさえある事も是認される、かつて天皇は、死刑の為めの絶対の対象でさえあった。

要するに、相互争闘は、主源体そのものによる衝動的行為ではなく、環境によって誘発された、排他的な積極的意識活動の結果であり、主体性として持つ、本能それ自身による秩序と美と、人間そのものの美を、常に傷つけて止まない、あやまてる意識活動の結果であり、善と悪とを仮定するならば、人間自ら作り上げた、悪の最高の、併も露骨な現象である。

故に環境の変革と、思想的自己解放の如き、意識活動に於て、この悪を、この野蛮なる弊習を抹殺する事は可能である。

史　観

一、本能論史観としての概要

本能それ自体は、一切の行為と動作の主因であり、存在そのものの決定的要素である、と共に、意識以前の主体であり、生物万般に共通する、自然の賦与する秩序である。

本能とは、もともと内在する描かれざる主体の歴史であって、文化に、経済に、生活に、思想に、哲学に、進化に、その総べてが内包する主動的部面であり、人類史にとって、欠く可からざる一素因である事は、論ずるまでもない事である。

人間性の発展や個性の拡充が、歴史の各項に、くまなく創造と進化を色彩るように、人間にとって、無支配、無権力、無拘束の本能現象にこそ、主体的実相を見得ると共に、自由と平和と幸福の源泉であり、併もそれ等を常に希求して止む事なく、意欲し続ける、そのものの主体と云う可く、人間性の最も無理のない自然な姿であり、しかもなお、独立と個性を平等に保証し、実証する存在の基点である。

即ち万世物の持つ自然体であり、人間生活に於ける基本的実体である。

これに反し、相互争闘は、環境的派生感念を主動因とする人為現象であって、本能その